裏切り異界人は学徒の守護を

ゆずぽん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

十一歳を迎えた少年少女はホグワーツ魔法魔術学校へと入学する。そして今日魔法界の英雄ハリーポッターが入学した。「ハリーポッターを取った！」獅子寮の生徒が歓声を上げた同時刻、別次元で民衆は沸きに沸いていた。

目次

最期の告白 ―――― 1

最期の告白

断頭台へ男の首は納められ、斬首を任された年若き騎士が台へと上がる。上がってきた騎士の顔を見ると、男は懐かしいように、笑って声をかけた。
「よお、エノーラ。…積もる話もあるが、まぁチャチャっと済ましてくれ」
「私には…なぜあなたがあちらに着いたのかが未だに分からないよ…」
「…何もおかしい事じゃない。エノーラ…君がそちらに着いたように、俺はこちらに着いたってだけの話だ。俺が男に生まれたように、君が女に生まれたように…受け入れるしかないものだ」
艶やかな金髪を靡かせ、白い鎧に身を包んだ女性、エノーラはその言葉を聞き、何も言わずに俯く。腰に携えた剣を握りしめ、今この状況を理解できないでいる。
「何故…何故なんだ！君は違うだろう！君は卑怯で野蛮なアルマの奴らなんかとは違うのに…。優しくて…強くて…」
「それは君が俺を十分に理解していなかっただけだろう？君は俺の何を理解して、俺を語るんだ？　子供の頃一緒に森で遊んで怪我したことか？　聖騎士となり苦楽を共にしたことか？　なあ、教えてくれ、エノーラ・サジリアス」

「知らないよ…知らなかったんだ…。君が抱えていた闇も、抱いていた我々への不信感も…不満も。　全部…全部君と向き合うことをしなかった我々がいけないんだ」

エノーラのその言葉に男は一つため息をつくと、視線を彼女から外し、下を向く。

「早く首を刎ねろ、そろそろ上が黙っちゃいないだろう」

彼女はその言葉に体を震わすと、少々垂れた青い瞳に涙を浮かばせる。腰に差した剣を抜き、天高く剣先を掲げた。

「…裏切り者〝ウルエラ・ヴァーラル〟の処刑を執行する！　この者は我らが祖国ククーダを守護する聖騎士団長でありながら、アルマはと寝返った大罪人！　よって、斬首刑に処す！」

エノーラが剣を構えると、待っていたかのように副団長が民衆へと叫ぶ。ウルエラは民衆からの罵声をこれでもかと浴びせられる。

「早く殺せ」「ククーダの面汚し」こんなものはウルエラには何一つ響かなかった。

「エノーラ…戸惑うな。得意だろ？思いっきりやるんだー」

静かに、一向に刑を執行しないエノーラに告げる。その言葉にエノーラは涙を腕で拭い、剣を構え直す。

「ウルエラ…私は君を愛していたよ…」

「俺もだよ」

そう言いきったかは分からない。彼らの小さな告白は民衆の歓声にかき消され、エノーラの涙に流される。民衆達の中には転がり落ちた首を蹴りつけたり、踏み潰す者もいた。だが、斬首された裏切り者は笑顔で、その顔が潰れ、肉塊へと成り下がるまで、天を見続けていた。

「おい、ここはどこだ。ククーダでもアルマでもないだろう。おい、聞いているのか、半人半馬！」
「今夜は火星が明るい」
「ああ、ダメだ、聞いちゃいない」